

『配偶者問題』にみるジェンダー

お茶の水女子大学大学院 渡辺めぐみ

本報告の目的は、農業・農村問題において非常に重要な問題の一つとして語られてきた、農業後継者のいわゆる「配偶者問題」について、ジェンダーを主要な軸として整理することを試みるものである。

「配偶者問題」とは、言うまでもなく農業後継者の男性の結婚難のことであり、つい最近まではいわゆる「嫁不足」として語られてきた「問題」であった。この「問題」の原因と対策に関しては、これまでにさまざまな議論が行われてきており、考え得るあらゆる原因が挙げられ、それが複雑に絡み合い、大変複雑な様相を呈している。「問題」の原因としては、農村のインフラ、農家の不安定な収入から、農業に対する差別意識、女性の「地位向上」、男性の「消極性」、農村の「封建性」、農家の母親の意識等へと多岐に及んでいる（光岡 1996）。とくに、フェミニズムの視点から、「嫁不足」という言葉に表現されるような、「配偶者問題」におけるジェンダーバイアスが指摘されたことにより（高橋 1996）、より一層多種多様な論点が生じてきている。

また、市町村単位で行われている「配偶者問題」対策の現状は変化しつつある。従来から対症療法的に行われてきた結婚相談員制度と男女の交流会事業が、現在においても二本柱であることには変わりないが、「配偶者問題」の対象は、農業後継者の独身男性に限らず、当該市町村全体における、非農家も含む独身男性全体へと広がりつつあるのである。それに伴い、「配偶者問題」対策の窓口も、農業委員会から地域振興に関わる課などに移行する市町村もみられる。つまり、「配偶者問題」は、農業後継者に特有の「問題」としては把握できなくなりつつあり、その対象自体が拡散しつつあるのである。

以上のような議論の状況、あるいは対策の現状のなかで、「配偶者問題」における「農業」「農家」という特異性に基づく求心力は弱まり、「問題」そのものの輪郭は非常にぼやけてきているように見える。

そこで本報告では、とくに、第二波フェミニズム以降の「配偶者問題」の原因と対策をめぐる議論を概観し、「配偶者問題」がどのように構成されてきたのかを、ジェンダー視点を軸としながら整理する。とりわけ第一に、「問題」の原因を「誰に、どのように」求めてきたのか、第二に、「結婚のあり方」をめぐって、どのような議論がなされてきたかという点に注目していく。さらに、これらの作業を通じて、「配偶者問題」におけるジェンダーバイアスについて検討するとともに、そのバイアスを是正するための方途について展望したい。

参考文献

- 高橋由紀 1996 「現代日本農村の「嫁不足」問題—山形県内陸地方P町の事例から—」
『女性文化研究センタ一年報』9・10号
- 光岡浩二 1996 『農村家族の結婚難と高齢者問題』 ミネルヴァ書房